

DPCとコーディング

- ◆ 国立病院機構九州医療センター
医療情報管理センター
阿南誠、秋岡美登恵、福島祥子
- ◆ アイネットシステムズ
久富洋子

●本日のお話の概要

★基本★

ICDの選択とDPCコーディング

◇DPC(診断群)分類決定の基本形

医療資源を最も投入した傷病名の選択

ICD-10で定義

1層

実施した手術

Kコードで定義

2層

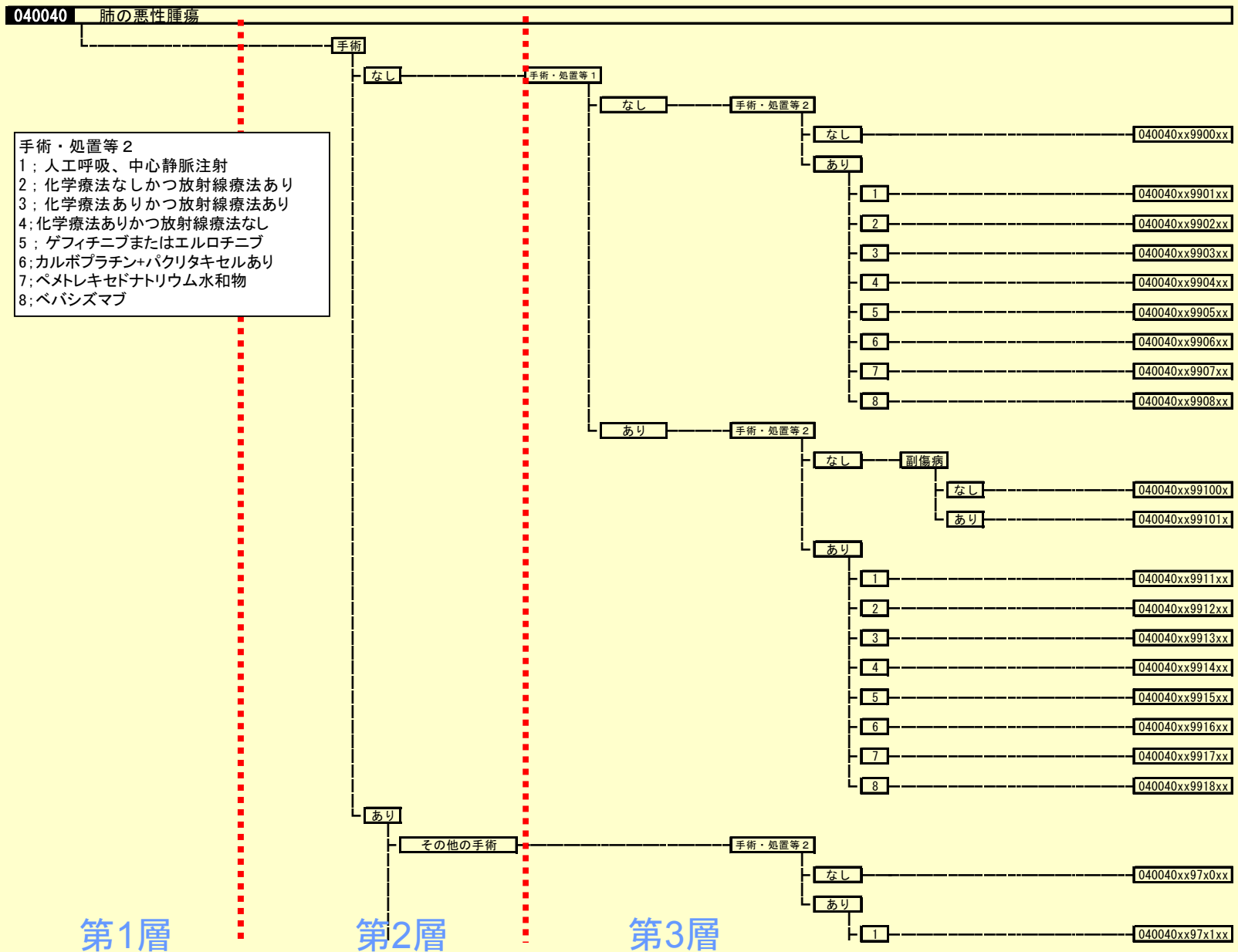
3層

副傷病名、補助療法、重症度等の要素

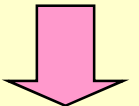
決定

※ICD:International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems 10th revision:
国際疾病分類

ツリー構造で示されるDPC分類の一例: 肺の悪性腫瘍



続く



診断群分類			医療資源を最も投入した傷病名		年齢、出生時体重		手術					
MDC	コード	分類名	ICD名称	ICDコード	コード	フラグ	年齢、出生時体重	手術分岐	対応コード	フラグ	点数表名称	区分番号等
第1層	04	0040	肺の悪性腫瘍	気管の悪性新生物	C33			手術なし	99	99	手術なし	
				気管支および肺の悪性新生物	C34\$				97	05	気管支腫瘍摘出術(気管支鏡又は気管支ファイバースコープによるもの)	K510
				肺の続発性悪性新生物	C780				97	06	胸腔内(胸膜内)血腫除去術	K494
				気管の上皮内癌	D021				97	07	気管支狭窄拡張術(気管支鏡によるもの)	K508
				気管支および肺の上皮内癌	D022				97	97		その他のKコード
				呼吸器系の上皮内癌、部位不明	D024			肺悪性腫瘍手術等	01	01	肺悪性腫瘍手術	K514\$
									01	02	気管支形成手術 輪状切除術	K5182
									01	04	肺切除術	K511\$
									01	04	胸腔鏡下肺切除術	K513\$
									01	04	胸腔鏡下肺悪性腫瘍手術	K514-2\$
第2層												

傷病名はICDで定義

第2層

第1層

手術・処置等1				手術・処置等2				副傷病			
対応コード	フラグ	処置等名称	区分番号等	対応コード	フラグ	処置等名称	区分番号等	対応コード	フラグ	疾患名	疾患コードまたはICDコード
1	1	気管支鏡検査、気管支カメラ	D301	8	12	ベバシズマブ		1	1	脳腫瘍	010010
1	1	気管支ファイバースコープ	D302	7	11	ペメトレキセドナトリウム水和物		1	1	骨の悪性腫瘍(脊椎を除く。)	070040
1	1	経皮的針生検法	D412	6	10	カルボプラチン+パクリタキセルあり		1	1	白血球疾患(その他)	130070
1	1	経気管肺生検法	D415	5	9	ゲフィチニブまたはエルロチニブ		1	1	敗血症	180010
				4	8	化学療法ありかつ放射線療法なし		1	2	胸壁腫瘍、胸膜腫瘍	040050
				3	7	化学療法ありかつ放射線療法あり		1	2	胸水、胸膜の疾患(その他)	040190
				2	6	化学療法なしかつ放射線療法あり					
				1	2	中心静脈注射	G005				
				1	1	人工呼吸	J045\$				

副傷病名は既定の分類、ICDで定義

第3層

番号	診断群分類番号	傷病名	手術名	手術・処置等 1	手術・処置等 2	副傷病	重症度等	入院日(日)			点数(点)		
								I	II	III	入院期間Ⅰ	入院期間Ⅱ	入院期間Ⅲ
373	040040xx9900xx	肺の悪性腫瘍		なし	なし			5	13	34	2,819	2,221	1,888
374	040040xx9901xx	肺の悪性腫瘍		なし	1あり			10	24	58	3,045	2,364	2,009
375	040040xx9902xx	肺の悪性腫瘍		なし	2あり			13	26	57	2,332	1,725	1,466
376	040040xx9903xx	肺の悪性腫瘍		なし	3あり			18	35	71	2,786	2,039	1,733
377	040040xx9904xx	肺の悪性腫瘍		なし	4あり			7	14	30	3,099	2,290	1,947
378	040040xx9905xx	肺の悪性腫瘍		なし	5あり			10	20	40	3,202	2,367	2,012
379	040040xx9906xx	肺の悪性腫瘍		なし	6あり			9	18	42	3,301	2,440	2,074
380	040040xx9907xx	肺の悪性腫瘍		なし	7あり			1	14	29	52,276	1,652	1,957
381	040040xx9908xx	肺の悪性腫瘍		なし	8あり			1	12	27	72,208	1,693	2,009
382	040040xx99100x	肺の悪性腫瘍		あり	なし	なし		2	3	6	3,394	2,064	1,755
383	040040xx99101x	肺の悪性腫瘍		あり	なし	あり		2	7	21	3,463	2,830	2,406
384	040040xx9911xx	肺の悪性腫瘍		あり	1あり			12	25	59	3,483	2,611	2,219
385	040040xx9912xx	肺の悪性腫瘍		あり	2あり			20	39	79	2,548	1,866	1,586
386	040040xx9913xx	肺の悪性腫瘍		あり	3あり			26	51	89	2,869	2,105	1,790
387	040040xx9914xx	肺の悪性腫瘍		あり	4あり			16	31	66	3,067	2,241	1,905
388	040040xx9915xx	肺の悪性腫瘍		あり	5あり			21	41	80	3,051	2,236	1,900
389	040040xx9916xx	肺の悪性腫瘍		あり	6あり			22	44	84	3,014	2,228	1,894
390	040040xx9917xx	肺の悪性腫瘍		あり	7あり			20	39	77	4,286	3,138	2,667
391	040040xx9918xx	肺の悪性腫瘍		あり	8あり			19	37	70	5,357	3,921	3,333
392	040040xx97x0xx	肺の悪性腫瘍	その他の手術あり		なし			6	16	41	2,827	2,236	1,901
393	040040xx97x1xx	肺の悪性腫瘍	その他の手術あり		1あり			17	35	80	3,177	2,373	2,017
394	040040xx97x2xx	肺の悪性腫瘍	その他の手術あり		2あり			21	42	83	2,631	1,945	1,653
395	040040xx97x3xx	肺の悪性腫瘍	その他の手術あり		3あり			30	59	113	2,927	2,149	1,827
396	040040xx97x4xx	肺の悪性腫瘍	その他の手術あり		4あり			16	32	71	3,018	2,230	1,896
397	040040xx97x5xx	肺の悪性腫瘍	その他の手術あり		5あり			21	42	90	3,128	2,311	1,964
398	040040xx97x6xx	肺の悪性腫瘍	その他の手術あり		6あり			22	44	97	3,016	2,230	1,895
399	040040xx97x7xx	肺の悪性腫瘍	その他の手術あり		7あり			19	38	88	4,292	3,172	2,696
400	040040xx97x8xx	肺の悪性腫瘍	その他の手術あり		8あり			16	33	83	5,350	3,995	3,396
401	040040xx01x0xx	肺の悪性腫瘍	肺悪性腫瘍手術等		なし			7	13	23	2,793	2,004	1,703
402	040040xx01x1xx	肺の悪性腫瘍	肺悪性腫瘍手術等		1あり			10	19	35	2,898	2,099	1,784
403	040040xx01x4xx	肺の悪性腫瘍	肺悪性腫瘍手術等		4あり			12	23	42	2,752	2,001	1,701

1層目

2層目

3層目

◇傷病名分類選択の基盤となるICD分類について

- 1) 傷病名(の範囲)は、ICD分類、正確には、「疾病及び関連保健問題の国際統計分類第10回修正」(International Statistical Classification of Disease and Related Health Problems, Tenth Revision)で定義されている。
- 2) 2012年現在、その2003年版を用いることとされている。当該分類は、3巻構成で、1巻が総論(いわゆるマニュアル)、2巻が内容例示表(コード体系)、3巻が索引である。
- 3) DPCの分類選択のためには、主たる傷病名を、1巻の総論に規定された各種のルールや定義に基づき、2巻のコードで決定することになる(必要に応じて3巻の索引を活用)。

3巻構成



ICD-10（2003年版）準拠は全3巻で構成されており、下記の内容が記載されています。

- ① **日本語版第1巻（WHO版Volume 2）**：総論
 - ・ 疾病および死因をコーディング（コード付け）する際のルール。
 - ・ 第2巻（WHO版Volume 1）及び第3巻（WHO版Volume 3）の使用方法
- ② **日本語版第2巻（WHO版Volume 1）**：内容例示表
 - ・ 分類コード及び項目の一覧
- ③ **日本語版第3巻（WHO版Volume 3）**：索引
 - ・ 疾病・傷害、症状、部位などの用語及びそのコード

ICDのABCより₈

★医療資源を最も投入した傷病？

◇主要病態の定義→主として、患者の治療または検査に対する必要性に基づく、保健ケアのエピソードの「最後に診断された病態」

◇そのような病態が複数ある場合は、「**もっとも医療資源が使われた病態**」を選択

◇もし診断がなされなかった場合は、主要症状または異常な所見もしくは問題を主要病態とする

※疾病、傷害および死因統計分類提要ICD-10(2003年版)準拠125頁

→すなわち、

★主要病態とは、退院時における診断名であり、単一の病態を選択するためには医療資源の投入量で判断すべきということである。また、どうしても診断が確定しない場合は、〇〇病疑いというような主要症状や異常所見として選択することになる。

★基本は、当該エピソードの期間、DPCの場合はその入院期間に、どの傷病名を主要病態として選択するのか、である。

★いわゆる「副傷病名」の定義

主要病態に加え、可能な場合はいつでも、保健ケアのエピソードの間に取り扱われるその他の病態または問題もまた、別々に記載するべきである。

その他の病態とは、

- 1) 保健ケアのエピソードの間に**存在し**
- 2) またはその間に**悪化**して
- 3) **患者管理に影響**を与えた病態
- 4) 現在のエピソードに関連しない以前のエピソードに関連する病態は記載してはいけない。

※疾病、傷害および死因統計分類提要ICD-10(2003年版)準拠125頁

■ICD分類とは？

1) 死因分類から発生したものである

※少なくともリアルタイムで傷病名进行分类する意図はない

2) コーダーが分类をするという前提に考えられたものである

等から、必ずしも臨床現場の考えを取り入れたものではない。

※臨床家の感覚との乖離は以前から指摘されてきた

3) 構造上の問題がある

※各分類を異なる者(国)が開発しているためか、DPCのように、臓器、病理の組み合わせというような構造にすべての分類が構成されているわけではない。

■DPC分類とは？

1)DPCは、臨床現場の経験から開発された分類である。

2)さらに、臓器(脳神経、頭頸部、眼、呼吸器・・・全身)と病理(腫瘍、炎症、変性、外傷、奇形等)の組み合わせを基本的構造としている。→したがって、傷病名は情報を含んでいる必要がある。また、臨床現場の親和性は問題ないはずである。

※当然、ICDを意識しつつも本来は無関連

※傷病名に情報を含む意味は、その検証やレセプトでも必須

※コーディングデータとの整合性は大丈夫か？→医療資源

レセ電算病名を使って、正しくコーディングするために
その特徴を理解しておきたい

●標準病名の理解(うまく使うために)

1)これら傷病名マスターは、あくまで、電子カルテやレセプト表記を行う目的で開発された経緯がある→電子カルテ、レセプト用ワープロ用語集？

2)ICDコードが振られているといっても、副次的なものである

※コードを振ることのできない傷病名、曖昧な傷病名も多数存在

3)接頭語や接尾語等の修飾語と組み合わせて初めて、日本語傷病名を構成する構造である

→『unspecificなコード』、すなわち、日本語訳版では、『部位不明、詳細不明等というコード』が与えられていることが多い。

4)全ての傷病名をカバーしているわけではない、全てのICDをカバーしているわけではない→ICDがついていない、つけられない傷病名もある(体内異物等)→2)のとおり

◇標準病名で病名を構成した例(不適当な例)

1) 良性、悪性等の区別

(1) 胃腫瘍(D37.1)→「悪性」+胃腫瘍(D37.1)→本当は胃癌(C16.9)

※ D37.1 : 胃の性状不明の新生物、詳細不明

※ただし、C16.9も精度からいうと問題あり

修飾語で帳尻を
あわせるとICD
が変わる！

2) 部位が明確になっていない

(1) 筋骨格系、損傷などは部位によって分類が異なる

・「尺骨」+骨折(T14.20)→本当は尺骨骨折(S52.20)

※T14.2: 部位不明の骨折

(2) 消化器系統等はかなり詳細な部位の明示を求める

・「噴門部」+胃癌(C16.9)→本当は噴門部癌(C16.0)

※C16.9: 胃の悪性新生物、部位不明

◆理解しておきたいこと

「DPC導入の影響評価に係る調査」実施説明資料から

Q: 標準病名マスタを必ず使わなければならないのか。手入力や院内で作成したマスタを用いてもよいか。

A: 標準病名マスタの使用を前提とするが、そこに含まれていない等の場合は、施設独自のレコードを使っても構わない。その場合、ICD-10 のコーディングはもちろん、データの仕様に準拠していること。

◇よく誤解されることは

1) 傷病名がないという指摘

→多くの傷病名は標準病名マスターに含まれる

→読み方、見方を変えると存在する

※未コード化傷病名

2) 「詳細不明」、「.9」の分類になるという指摘

→ICDの構造の理解不足

→標準病名マスターの構造の理解不足

「精度」を確保するために……、

→コーディング精度監査は、平成20年度の診療報酬改訂時のDPC対象病院の要件として、「適切なコーディングに関する委員会の設置」として具体化。

→さらに、「詳細不明コード」のハードルが上がった？

(1) DPC対象病院においては、院内で標準的な診断及び治療方法の周知を徹底し、適切なコーディングを行う体制を確保するため、委員会を設置して責任者を定めること

(2) 委員会は診療部門、薬剤部門、診療録情報を管理する部門、診療報酬の請求事務を統括する部門等に所属する医師、薬剤師及び「診療情報管理士」(診療録管理担当者)等から構成され、少なくとも年に2回は開催すること

◆DPCであるか否かに係わらず、それなりの「監査」は必要

1)DPC、がん登録、入院診療記録、外来診療記録等

2)いわゆるカルテ開示や証拠保全等への対応等

3)適正な診療報酬請求のためにも必要

4)公的な報告、調査等

●DPC評価分科会における議論

平成25年度第5回診療報酬調査専門組織・DPC評価分科会

平成25年7月26日(金)10:00～12:00

於 中央合同庁舎第5号館専用第22会議室(18階)

→別紙資料参照

★コーディングの精度を十分に確保出来ない理由

- 1) ICDコーディングのスキルが十分ではない
- 2) 体制が十分ではない→委員会が機能していない
- 3) アップコーディングと評価されかねない

●影響調査等のデータベース項目の議論

過去に定義が十分ではなかったために、
その解釈を巡って議論になったことがあった



基礎調査の度に定義は明確にされていった・・・が・・・

データの定義付けが不明確で問題となったこと

1) 主病名とは？→医療資源投入、治療目的、かつて最も重篤、診療科、病理診断→(ケースバイケース)

※ICDのルールで

2) 救急とは？→救急車、時間外、診療録に記載したもの？

3) 転帰とは？→治癒、軽快、寛解、不変、検査終了

※改訂により、定義付けはかなり進んだ

定義標準化の一つの例：

「転帰の根本的定義」

転帰とは、あくまで今回の入院時と比較してのものであり、必ずしも原疾患そのものに対してのものではない。

したがって、今回の入院において、入院時と退院時と比較した結果によって転帰を判断するものである。

さらに、退院時の判断によるものであるから、以後の転帰を保証するまたは考慮したものではない。

例えば、医師が退院時に転帰を判断した後、それ以降、患者の状況が変化したとしても退院時の転帰を覆すものではない。

治癒・・・退院時に、退院後に外来通院治療の必要が全くない、または、それに準ずると判断されたもの。

軽快・・・疾患に対して治療行為を行い改善がみられたもの。原則として、その退院時点では外来等において継続的な治療を必要とするものであるが、必ずしもその後の外来通院の有無については問わない。

寛解・・・血液疾患などで、根治療法を試みたが、再発のおそれがあり、あくまで一時的な改善をみたもの。

不変・・・当該疾患に対して改善を目的として治療行為を施したが、それ以上の改善が見られず不変と判断されたもの。

ただし、検査のみを目的とした場合の転帰としては摘要しない。

増悪・・・当該疾患に対して改善を目的として治療行為を施したが、改善が見られず悪化という転帰を辿ったもの。

死亡

その他・・・単なる検査入院（人間ドック、確認力テ等）、正常分娩、その他患者の自己退院等本来の医療の結果以外の理由で退院となったもの。

◇傷病名の定義は考え方だから、厄介な課題であること

1)「事実」の定義は改善が容易、「考え方」の定義は難しい

→理解や意識を統一するのは大変

→いつまでも勉強しない人が必ず存在する

→そもそも、本来は「診療記録」がその根拠となるが、診療記録
そのものが判断に十分ではない……。

平成10年当時から関係者は改善に努力したが……、

病名付与の留意点の一例

章	ICD10	分類	留意点
I	A00-B99	感染症及び寄生虫症	局所感染は除き、原因菌、病原体を記載 妊娠合併、周産期を除く
II	C00-D48	新生物	良性、悪性の区別、部位、性状、上皮性、原発巣 転移の場合)、術後、治療後を記載、単なる嚢腫は新生物ではないので注意
III	D50-D89	血液および造血器の疾患ならびに免疫機構の障害	薬剤等の外因に起因する場合はその原因を記載
IV	E00-E90	内分泌、栄養および代謝疾患	薬剤等の外因に起因する場合はその原因を記載
V	F00-F99	精神および行動の障害	詳細な型の記載 (ICDの成書を参照すること)
VI	G00-G99	神経系の疾患	遺伝性、変性疾患、その他の障害、急性か後遺症かの区別
VII	H00-H59	眼および付属器の疾患	左右、両側を明示
VIII	H60-H95	耳および乳様突起の疾患	急性
IX	I00-I99	循環器系の疾患	リウマチ性、高血圧性、急性、亜急性、陳旧性の明示
X	J00-J99	呼吸器系の疾患	急性、慢性の区別、病原体の記載
XI	K00-K93	消化器系の疾患	急性、慢性の区別、病原体の記載、詳細な部位の記載
XII	L00-L99	皮膚および皮下組織の疾患	部位の記載、感染性の場合は原因菌、病原体の記載
XIII	M00-M99	筋骨格系および結合組織	病変部位の記載、神経障害の有無、新鮮損傷と陳旧性の区別

◇DPCコーディングの問題、課題

1) ICDコードという「世界標準」を用いるから大丈夫、という誤解、勘違い

※そもそも理解無くICDのルール運用を出来るはずもない

2) 定義、ルールの統一が困難なことに起因するデータベース精度の不揃い

※データベース項目の標準化を行っても、精度の問題は別

3) 傷病名付与そのものの問題とICD分類精度の問題。

※そもそも適切な傷病名の選択、がなされていない

※分類選択も正しく行われていない

→傷病名付与について、定義が曖昧だった点については、傷病名を3つに定義付けすることによって解決した。

◇「傷病名」に関する基本的な問題：含まれる情報は十分か？

1)「傷病名」からICDに明確に区分出来る必要がある。

2)傷病名に「必要な情報」が含まれていない

3)標準病名の使用を推奨、しかし、正しい使い方がされていない

※接頭語、接尾語等の「修飾語」の存在は、ICD的には致命的な欠陥をもたらすこともある(標準病名やICDの理解が必要)。

→評価する側、審査する側の意向を考えなければならない。

◇精度の高い病名コーディングができない要因

1) 曖昧な病名に基づくもの……

「腎腫瘍：D41.0」→もっと情報が必要

部位？悪性？良性？原発性？続発性？

2) コーディングについての知識不足

「新生児一過性イレウス」→新生児の意味を知らない

:P76.1(正しい)→K56.-(誤り)

3) コーディングツールと病名マスターの無理解

「膵炎：K85」「急性膵炎：K85」

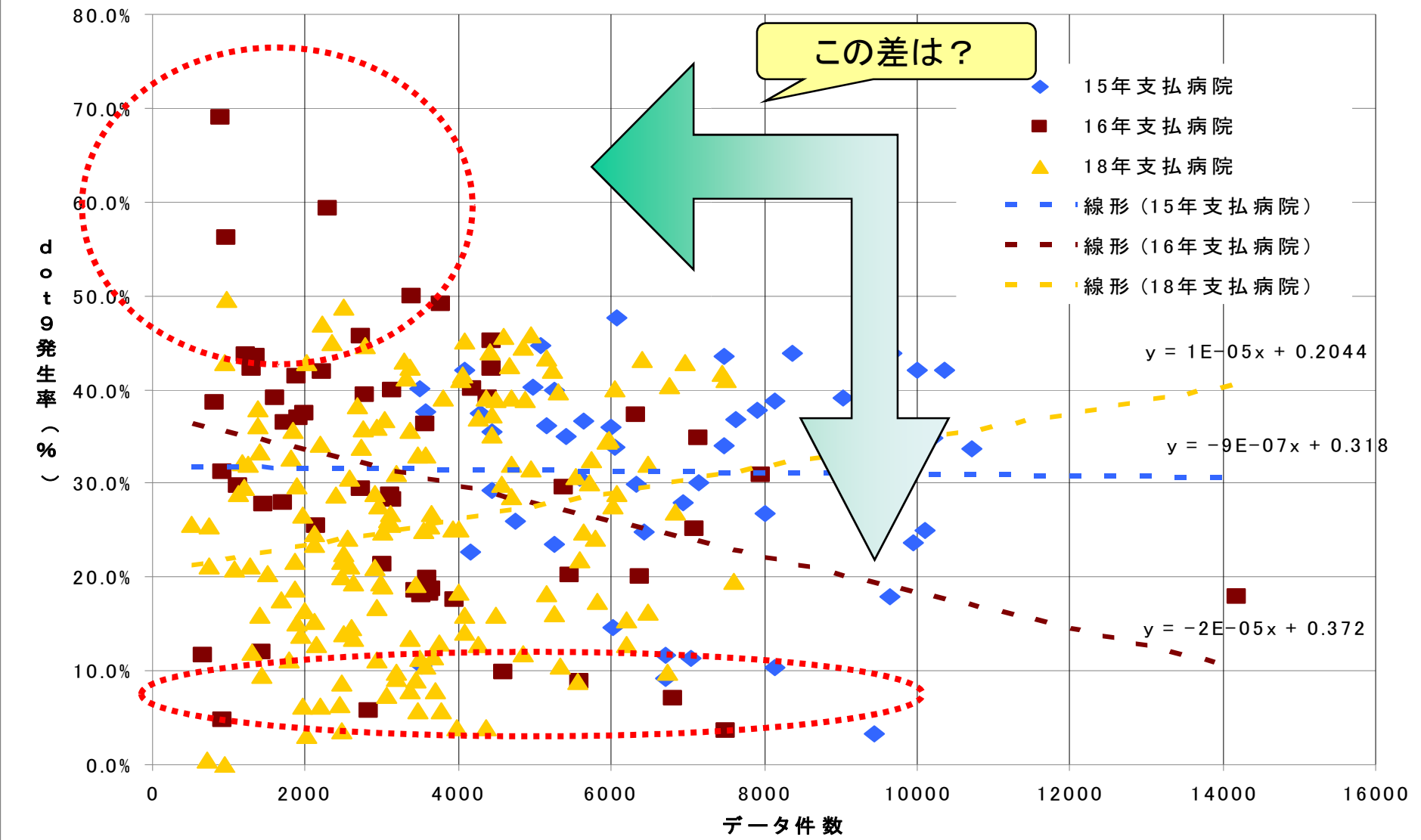
「慢性膵炎：K86.1」 →「慢性＋膵炎：K85」ではまずい

※急性を優先する考え方

前述したように、ICDの構造的な問題からDPCの概念(臨床的分類)と一致しない分類があるが、ICDの構造以前にコーディング精度にも問題がある、データの信頼性は？

議論の発端は以下の報告から・・・

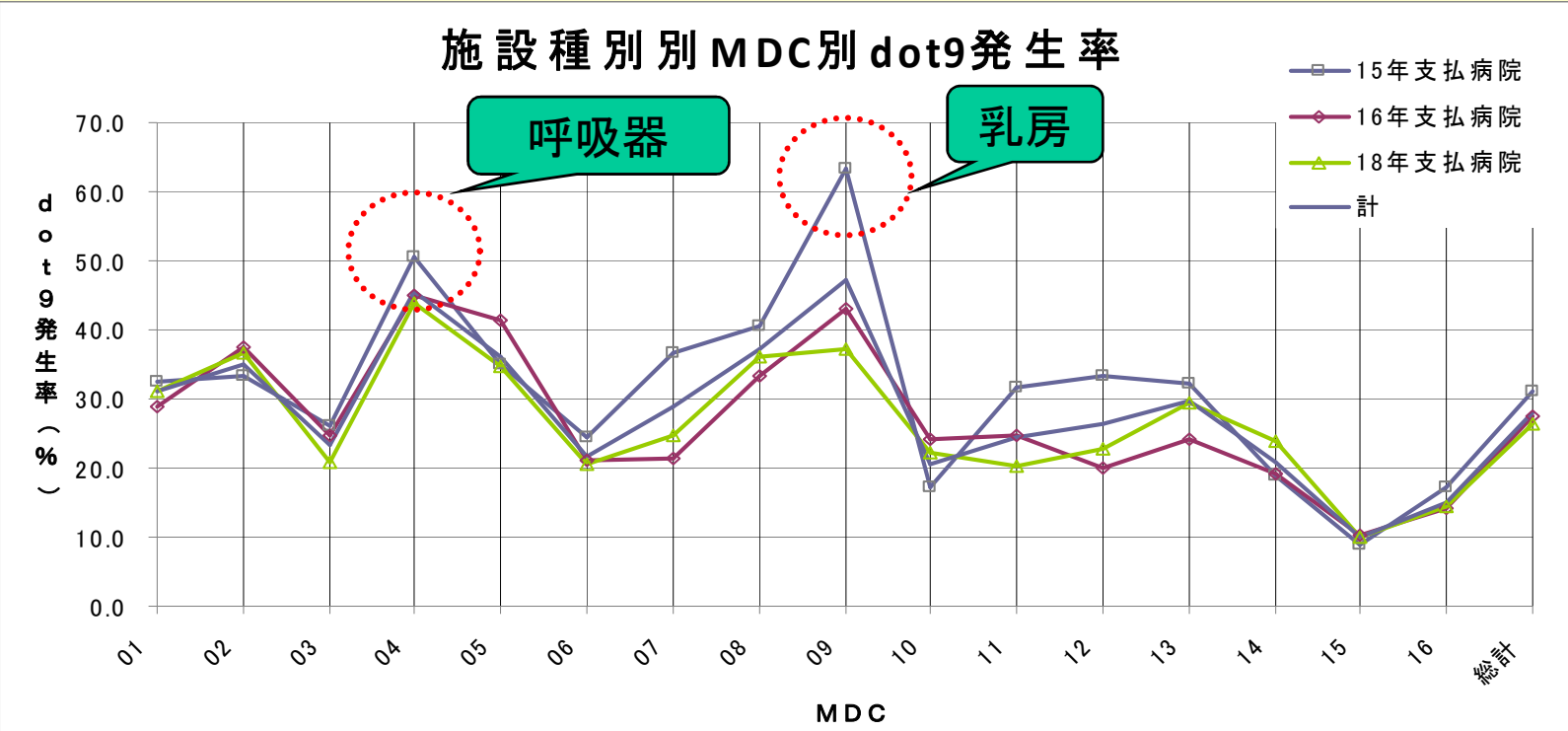
グラフ3：施設類型別 dot9発生率



平成19年11月2日、DPC評価分科会：施設類型別のMDC別「.9」発生率

50%を超えたもの

MDC	DPC対象病院			16年支払病院			18年支払病院			計		
	ALL	dot9	dot9%	ALL	dot9	dot9%	ALL	dot9	dot9%	ALL	dot9	dot9%
01	23,201	7,570	32.6	12,709	3,682	29.0	40,296	12,514	31.1	76,206	23,766	31.2
02	27,480	9,140	33.3	7,491	2,807	37.5	21,973	8,042	36.6	56,944	19,989	35.1
03	18,929	4,939	26.1	8,546	2,104	24.6	25,345	5,270	20.8	52,820	12,313	23.3
04	28,336	14,315	50.5	22,548	10,119	44.9	66,318	29,030	43.8	117,202	53,464	45.6
05	33,350	11,660	35.0	19,946	8,259	41.4	58,598	20,384	34.8	111,894	40,303	36.0
06	63,473	15,491	24.4	42,653	9,056	21.2	126,998	26,144	20.6	233,124	50,691	21.7
07	24,524	9,024	36.8	9,114	1,941	21.3	27,785	6,840	24.6	61,423	17,805	29.0
08	4,720	1,916	40.6	2,188	727	33.2	6,439	2,328	36.2	13,347	4,971	37.2
09	4,896	3,102	63.4	2,240	965	43.1	6,896	2,558	37.1	14,032	6,625	47.2
10	13,850	2,381	17.2	6,124	1,479	24.2	17,822	3,940	22.1	37,796	7,800	20.6
11	25,739	8,155	31.7	16,111	3,985	24.7	46,552	9,481	20.4	88,402	21,621	24.5
12	27,947	9,316	33.3	10,796	2,168	20.1	32,915	7,506	22.8	71,658	18,990	26.5
13	9,922	3,194	32.2	4,618	1,118	24.2	12,360	3,651	29.5	26,900	7,963	29.6
14	11,184	2,112	18.9	3,782	727	19.2	9,104	2,170	23.8	24,070	5,009	20.8
15	2,969	268	9.0	4,467	455	10.2	12,466	1,265	10.1	19,902	1,988	10.0
16	20,901	3,626	17.3	15,152	2,157	14.2	45,734	6,576	14.4	81,787	12,359	15.1
総計	341,421	106,209	31.1	188,485	51,749	27.5	557,601	147,699	26.5	1,087,507	305,657	28.1



C34 気管支及び肺の悪性新生物

C34.0 主気管支

C34.1 上葉, 気管支又は肺

C34.2 中葉, 気管支又は肺

C34.3 下葉, 気管支又は肺

C34.8 気管支及び肺の境界部病巣

C34.9 気管支又は肺, 部位不明

疑問:手術をしていながら、詳細部位が不明と
いうことがあるの
か.....?

C50 乳房の悪性新生物

C50.0 乳頭部及び乳輪

C50.1 乳房中央部

C50.2 乳房上内側4分の1

C50.3 乳房下内側4分の1

C50.4 乳房上外側4分の1

C50.5 乳房下外側4分の1

C50.6 乳腺腋窩尾部<Axillary tail of breast>

C50.8 乳房の境界部病巣

C50.9 乳房, 部位不明

◇DPCの普及につれて、ICDの理解も深まり、
コーディング精度の改善は著しいものの、新たに
課題も発生している。

図表1：平成22年度研究班データの概要

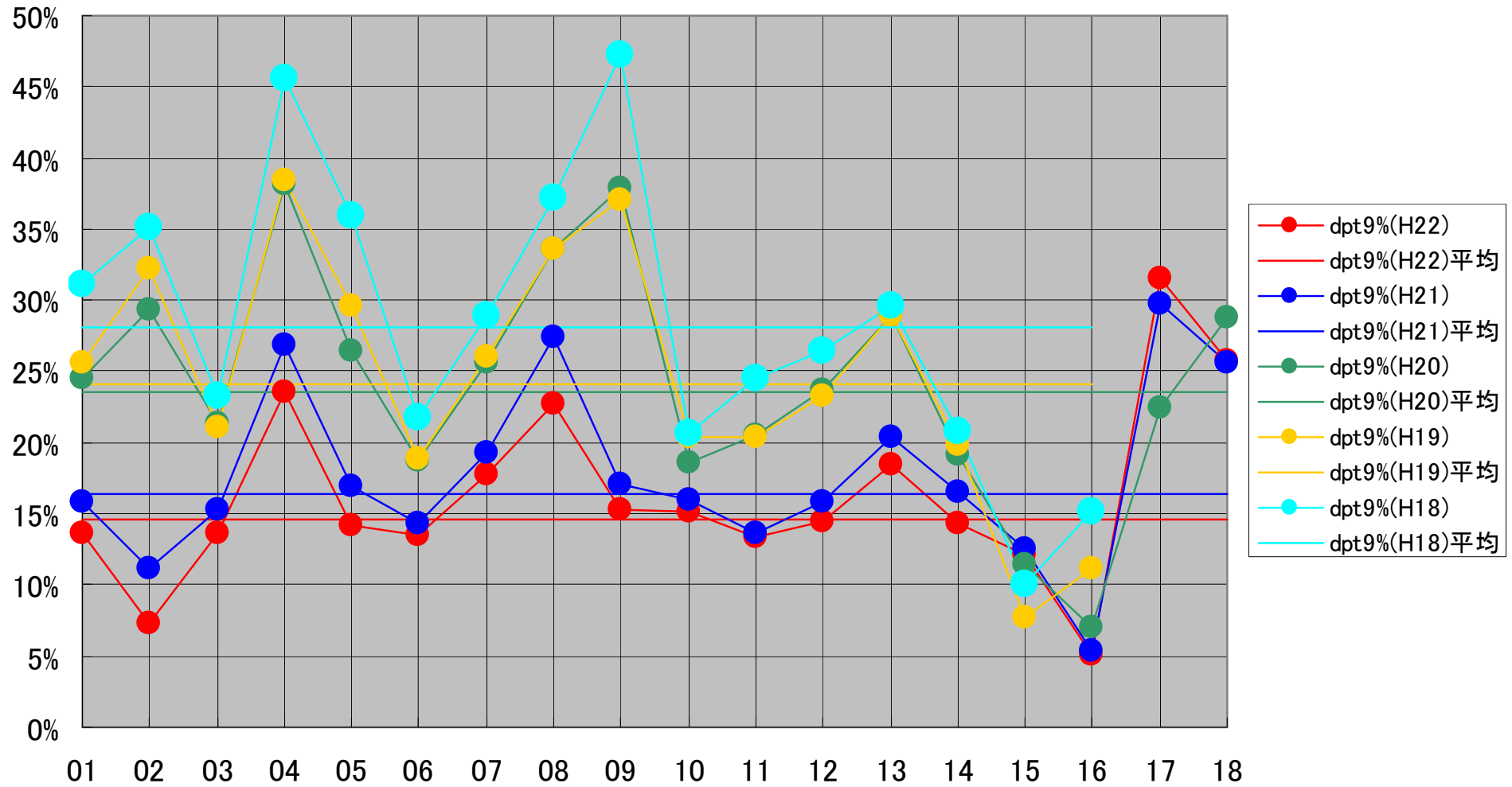
MDC	件数	dot9件数	←%
01	142,426	19,376	13.6%
02	104,897	7,602	7.2%
03	87,827	12,008	13.7%
04	237,430	55,862	23.5%
05	212,828	30,129	14.2%
06	468,843	63,049	13.4%
07	116,626	20,734	17.8%
08	36,697	8,342	22.7%
09	25,937	3,972	15.3%
10	71,227	10,771	15.1%
11	166,488	22,235	13.4%
12	147,936	21,412	14.5%
13	52,491	9,654	18.4%
14	51,201	7,344	14.3%
15	28,740	3,490	12.1%
16	153,751	7,860	5.1%
17	14,270	4,500	31.5%
18	38,022	9,803	25.8%
他	13,083	1,591	12.2%
	2,170,720	318,143	14.7%

図表2：「.9」コード出現の経年変化

MDC	H22	H21	H20	H19	H18
01	13.6%	15.8%	24.6%	25.6%	31.2%
02	7.2%	11.1%	29.4%	32.2%	35.1%
03	13.7%	15.2%	21.3%	21.1%	23.3%
04	23.5%	26.9%	38.2%	38.4%	45.6%
05	14.2%	17.0%	26.4%	29.6%	36.0%
06	13.4%	14.3%	18.8%	18.9%	21.7%
07	17.8%	19.3%	25.7%	26.0%	29.0%
08	22.7%	27.4%	33.6%	33.5%	37.2%
09	15.3%	17.1%	37.9%	37.1%	47.2%
10	15.1%	16.0%	18.6%	20.4%	20.6%
11	13.4%	13.7%	20.6%	20.4%	24.5%
12	14.5%	15.9%	23.6%	23.3%	26.5%
13	18.4%	20.3%	29.0%	28.9%	29.6%
14	14.3%	16.5%	19.2%	19.9%	20.8%
15	12.1%	12.5%	11.5%	7.8%	10.0%
16	5.1%	5.4%	7.1%	11.1%	15.1%
17	31.5%	29.7%	22.4%		
18	25.8%	25.6%	28.8%		
平均	14.7%	16.4%	23.5%	24.1%	28.1%

※平成20年度までMDCは16分類であった。

図表3MDC別「.9」発生率



◇「コーディング精度」に対する、議論が中医協、DPC分科会等でなされる一方で、審査支払機関も、??、と言いはじめた。

→次回改定に向けて、コーディングマニュアルの議論が出現した。

◇DPC制度運用に関する課題についての検討

③ 適切な DPC コーディングに関する対応案のとりまとめ

平成25年秋
頃まで

<考え方>

- 適切な DPC コーディングに関する対応案(コーディングに関するマニュアルの作成、コーディングの現状(質)に関するモニタリング(評価手法)の開発等)に関する検討については、次回改定時を目途に一定の対応が可能となるよう、とりまとめてはどうか。
- その際、コーディングの質的評価については、機能評価係数Ⅱのデータ提出係数の評価のあり方と一体的に検討することが望ましいことから、平成25年秋頃までを目途に対処案をとりまとめてはどうか。

⑥適切なDPC コーディングに関する対応案(コーディングに関するマニュアルの作成、コーディングの現状(質)に関するモニタリング(評価手法)の開発等)のとりまとめ

DPC 制度に関する今後の検討方針について(検討課題とスケジュールの整理)(案):2012年6月20日DPC評価分科会資料から

◇今後の展望と検討課題

1. 調整係数から基礎係数・機能評価係数への置換え
 - 基礎係数・医療機関群のあり方(特にⅢ群)
 - 機能評価係数Ⅱの更なる見直し
2. DPCの更なる精緻化
 - CCPマトリックス導入の検討
3. DPCコーディングの標準化／適正化
 - ガイドラインの策定と共有
 - 評価／モニタリング手法の開発
4. DPCを活用した診療実績(医療の質)の分析・開示の推進
 - 退院患者調査結果の集計・分析手法の見直し
 - 病院自身による診療実績の分析と情報発信の促進
5. 外来・入院の一体的な診療の分析・評価の検討
 - 外来診療データの収集と分析

◆某審査支払機関での疑義から

- 1) 傷病名のコーディングは十分な精度をもっているか？
- 2) コーディングの結果が本当に診療の内容と合致しているか？。

※問題の例

- (1) がん術後→本当に「がん」の治療をしました？。
- (2) ○○状態→本当に「○○」は病名？。
- (3) 傷病名と処置手術の対象は合致しています？。
- (4) 「術後」？→術後に何があったのかそれが「病名」。
- (5) 腎不全？→たったの2日で本当に腎不全の治療を？。

◇レセプトの例から

(1)明らかに白内障の治療しかしていないのに？→腎不全？。

(2)大腸の悪性腫瘍？C18.9？

そもそも、C18.\$って？。

C18	結腸の悪性新生物
C18.0	盲腸
C18.1	虫垂
C18.2	上行結腸
C18.3	右結腸曲<肝弯曲>
C18.4	横行結腸
C18.5	左結腸曲<脾弯曲>
C18.6	下行結腸
C18.7	S状結腸
C18.8	結腸の境界部病巣
C18.9	結腸, 部位不明

◇原則として、治療（手術）の対象が分かっている以上、傷病名の部位も当然あると考えるのが自然（審査する立場でも）。

→しかし、曖昧な部位や対象が散見される。

1) 部位等がわからないのではなく、ICDやDPCの知識、特にコーディングを行う者、チェックする者のスキルに依存する

2) 場合によっては明らかなアップコーディングとされたり、「詳細不明コード」隠しと評価される可能性あり

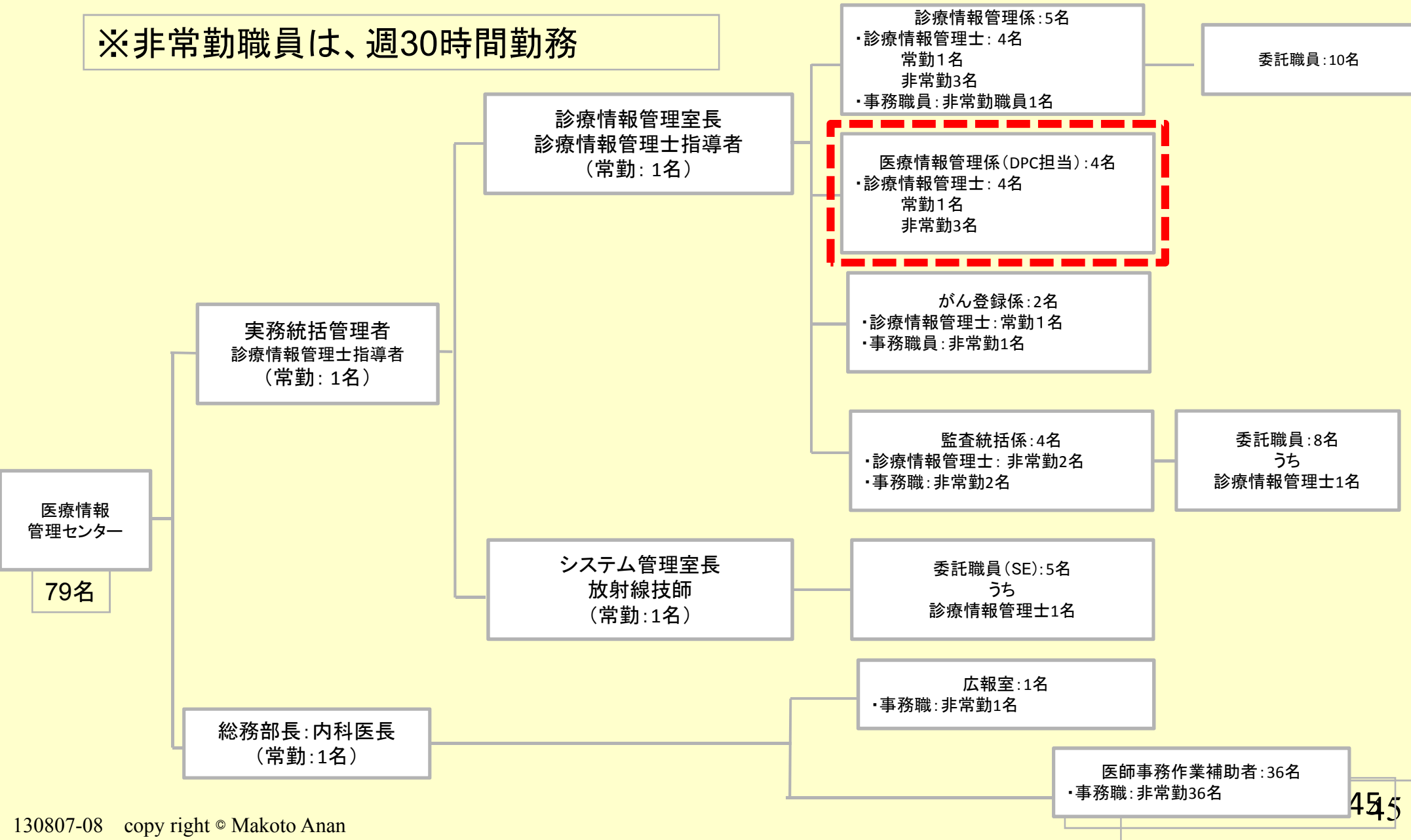
◇アップコーディングと見なされかねない、例

- 1)「心不全」→原疾患として、心筋症、心筋梗塞等が明らか
- 2)「呼吸不全(その他)」→原疾患として、肺炎等が明らか
- 3)「手術・処置等の合併症」→IVHカテ先の感染
- 4)「手術・処置等の合併症」→入院中の術後の創部感染
- 5)「DIC等の続発症」→診療内容からして医療資源の投入量等の根拠に乏しいもの
- 6)「Rコードの多用」→診断が確定しているにも関わらず、漠然とした兆候による傷病名の選択

※鼻出血、喀血、出血、等の頻用・・・

医療情報管理センター組織図

※非常勤職員は、週30時間勤務



当院のDPC登録の流れ

入院

入院日：DPCオーダーを立てる。



入院3日以内：DPC（診断群分類）仮登録を行う。

※DPC仮登録は、必ず「入院から3日以内」に！！



入院期間中：DPC（診断群分類）に関連する
病名や手術・処置等、変更や追加がある都度、
登録内容を確認し、誤りがあれば修正を行う。



退院日前々日：退院オーダーを立てる。

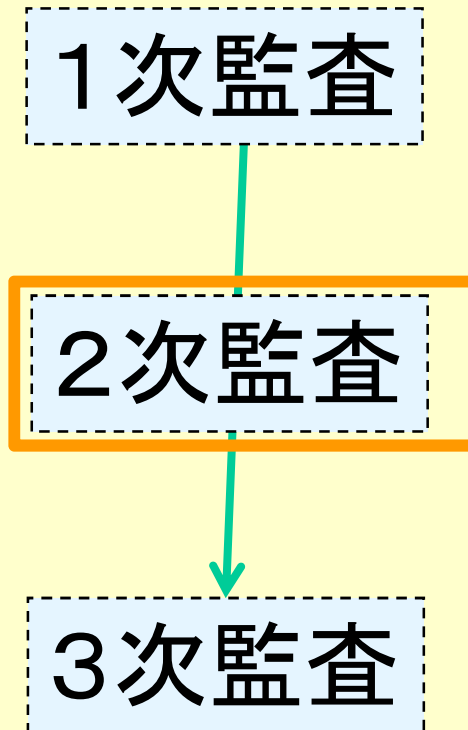
DPC（診断群分類）の本登録を行う。

※退院オーダーは退院前々日の午後15時まで！！

退院

DPCを含む診療記録の監査について

1. 外来診療記録の監査
2. 入院診療記録の監査



入院：1次監査 について

<2次監査>

<3次監査>

<1次監査>

- ・診療記録(監査)委員会等で決定した11項目に対して行なう。
- ・監査システムを利用する。
- ・毎日監査し、結果(督促)を文書で該当者に届ける。
- ・定期的に監査結果を診療記録(監査)委員会等に報告する。
- ・報告を受けた診療記録(監査)委員会は資料をもとに議論し、改善に繋げる。

入院：2次監査(DPC)について

<1次監査>

<2次監査>

- ・DPC項目(様式1など)と診療記録との整合性を確認する。
- ・傷病名と医療行為、転帰などとの整合性を確認する。
- ・診断群分類分岐に影響を与える項目について確認する。
- ・提出前のデータや返却データを
確認する。

<3次監査>

DPC監査について

- DPC監査担当者
 - ◆病棟事務担当者(委託会社職員)
 - 各病棟に1人配置、全15名
 - ◆専任チェック担当者(委託会社職員)
 - 医事に1人配置(診療情報管理士)
 - ◆医療情報管理係
 - 医療情報管理センターに4人配置
(全員診療情報管理士)
- ※さらに医師事務作業補助者が関与する

DPC監査によって分類が変更となった事例

◆事例1

医療資源病名	ICD10	手術	処置	診断群分類	電子カルテ記載
到着時心肺停止	I46.9	なし	中心静脈注射が『なし』になっており、「誤り」である。	したがって、050210xx9700xxのコードも誤り。	【退院時サマリ】 中心静脈カテーテルを挿入の記載あり 【プログレスノート】 Dr.〇〇にて中心静脈カテーテルを挿入しの記載あり。

↓	↓
中心静脈注射 『あり』 が正しい	050210xx9702xx が正しいコード

◆事例2

医療資源病名	ICD10	手術	処置	診断群分類	電子カルテ記載
胸部大動脈瘤切迫破裂は、コーディングに十分な粒度をもたない	I712 は正しい ICDではない	冠動脈、大動脈バイパス移植術	対外ペースメーカー 人工腎臓	050163xx01x4xx は正しいコードではない	【手術記録】 Patient Profile 「破裂の診断で当院緊急搬送」の記載あり。 【死亡診断書】 「胸部大動脈瘤破裂」の記載あり。

↓	↓	↓	
正しくは、「破裂」しているため 破裂性胸部大動脈瘤と扱う	I711	★当該分野のICDコード:破裂性か否かがポイント I71.1 胸部大動脈瘤, 破裂性 I71.2 胸部大動脈瘤, 破裂の記載がないもの	050162xx01x4xx が正しいコード

入院：3次監査について

<3次監査>

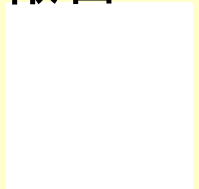
- ・退院時要約を基準に診療記録との整合性を確認する。
- ・退院時要約、DPCデータ、診療記録との整合性を確認する。
- ・日々記録が適正になされているか確認をする。
- ・カルテ開示に備え、記載方法、適正か否かについて確認する。

<1次監査>

<2次監査>

DPC委員会の開催について

- ① 毎月第二水曜日開催（診療記録委員会に引き続き開催）
- ② 構成：副院長、診療部長、看護部長、事務部長、副薬剤科長、副放射線技師長、副臨床検査技師長、医師、看護師長、算定係長 +医療情報管理センター：総務部長、実務統括管理者、診療情報管理室長、システム管理室長、診療情報管理士、SE
- ③ 病棟事務担当者との小委員会（改善勉強会）の報告、未解決問題や医師・看護師等の協力が必要なもの等を議論する。
- ④ 診療報酬改定に伴うDPCの変更等、今までのDPC登録業務と異なる事が発生した場合や特別調査等の協力等、DPC業務に関する報告や議論を行う。



DPC小委員会(DPC改善のための勉強会)について

<10月の議題>

- 1) 10月退院分基礎登録項目監査結果報告
- 2) 10月Kコード監査結果報告
- 3) エラーリストチェックのエラー報告
- 4) 10月退院分未解決率報告
- 5) 11月退院分締切チェック結果報告
- 6) 形式チェックエラー報告
- 7) 退院時処方の病名登録について
- 8) 病名マスタ登録の手順について
- 9) 月末スケジュール調整について
- 10) 年末のスケジュール調整について、その他
 - ★胃癌詳細部位とコード(体部・前庭部)について
 - ★甲状腺良性腫瘍について
 - 甲状腺良性腫瘍(Dコード)、甲状腺腫(Eコード)
 - ★間違ったコーディングの考え方、捉え方、対応

院内教育について

- ・毎年、新採用オリエンテーション時に全職員に対して講義
- ・医療情報センター内の月例会議にて、DPCを含めて、担当スタッフによるプレゼンを行い、スタッフ間の情報共有を行う
- ・平成25年度は、数ヶ月をかけて各診療科を行脚して、医師、看護師を対象に、保険制度とDPCについて、講義とディスカッションを行う計画→全職員に対しては6月に実施済み

今後、特に注意しておきたいこと

- 1) 公開データとして耐えられない状態は恥ずかしい
 - 2) 「.8置き換え」に代表されるような姑息的な対策は恥ずかしい
 - 3) 審査支払機関等でも疑わしい案件については議論が重ねられている
- ※DPC事務局の保険局は同時に特定共同指導等も実施
- 4) 適正な傷病名の選択、分類(コーディング)精度についても評価が始まる
 - 5) 曖昧、根拠に乏しい傷病名の選択は、アップコーディングと評価されかねない

Thank you for your attention !